

あかるく かしこく たくましく

令和6年3月6日 No. 50 文責：校長 佐野紳二

詩を読む おすすめの詩・詩人5選

先週の金曜日、小笠原小学校の6年生を送る会が行われました。コロナ禍の3年間はオンラインで実施されていた本校の6年生を送る会が、久しぶりに全校児童が体育館に一堂に会して行うことができ、本当に嬉しく思います。会の中では下級生は学年ごとに歌や呼びかけなどで6年生へのメッセージを発表し、6年生からも下級生に向けたメッセージが贈られました。それぞれにとってもステキなメッセージで、とても温かい心に残る素晴らしい会になったと思います。

そんな子どもたちの姿を見て、自分にも何かできることはないかな…と考え、今日は卒業を間近に控えた6年生と、そんな6年生に素敵なメッセージをプレゼントしてくれた1～5年生のみなさんに、私のおすすめの詩を5編、プレゼントしたいと思います。

素顔のまま

折原みと

夕陽の沈む

一番キレイな瞬間が見たくて、
息が切れるまで走ることは
はずかしいことだとは思いません。

消えかけた虹の色を追いかけて、
迷い子になってしまった子供を
しかることはできません。

雲の上で寝ころびたいと、
カゼをひいた人を
笑うことはできません。

素直なままでいたいよ。
キレイなモノを、
キレイだって、言いたい。

人の目を気にして、
一番上等のモノを
見逃してしまうなんて。
そっちのほうが、
よっぽどバカなことだって思うよ。

未という字

秋葉てる代

「否定の意味をもつ字は四つあります。

非・不・無、そして未。」

国語の時間になったこと

非常識、不可能、無意味

否定されるのは かなしい言葉が多い

でも 四つの中で「未」だけは

どこかちがっている

未来 —— まだ来ない。でも、いつかきっと

来るかもしれない。(来るだろう。)

未知 —— まだ知らない。でもいつかきっと

知るかもしれない。(知るだろう。)

今はないけど でもいつか

否定しながら どこかに希望を残している

パンドラの箱のような「未」という字

私は今 何ももたないけれど

「未」という字にかけてみよう

未完成な 私の未来に

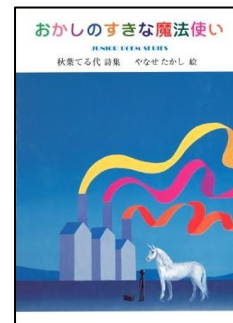
私は非でも不でも無でもなく

まだ「未」なのだと



折原みとさんも秋葉てる代さんも、おそらく詩人としてよりも、別な方面での活躍のほうが有名な人なのだと思います。

折原みとさんは漫画家・小説家として有名な方です。小説は1990年に刊行された「時の輝き」がベストセラーになり、映画化もされたので、もしかしたらお父さん・お母さんでご存じの方がいるかも知れませんが、今日紹介した「素顔のままでは、唯一の詩集「Pure—素顔のままの君でいて」に掲載された詩です。



秋葉てる代さんは詩人としてよりも作詞家としての方が有名で、きっと多くの人が聞いたことがある「おかしのすきな魔法使い」という歌の作詞者として知られています。(♪おかしのすきな魔法使い パンプキンパイが食べたくて…という歌です)「未という字」は詩集「おかしのすきな魔法使い」に掲載されています。

第一歩

須永博士

いまからなんです
そうです
いまからはじめるのです
いまから本気でやりはじめれば
きっといつの日か
やりとげられた日がくると信じます
つらい道かもしれませんが
ひとりぼっちの道かもしれません
不安な道かもしれませんが
でもやるんです
いまから
夢にむかって
わたし
第一歩です

おれはかまきり

かまりりりゅうじ (工藤直子)

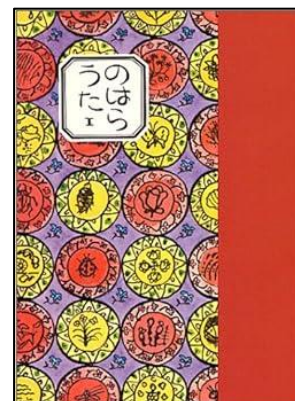
おう なつだぜ
おれは げんきだぜ
あまり ちかよるな
おれの ころも かまも
どきどきするほど
ひかってるぜ

おう あついぜ
おれは がんばるぜ
もえる ひをあびて
かまを ふりかざす すがた
わくわくするほど
きまつてるぜ

須永博士 (すながひろし) さんは現在81歳の詩人であり画家であり書家であり陶芸家でもある人です。以前勤務していた学校の同僚が須永さんの詩が好きで、教室に飾ってあったのを見たのが須永さんの作品との出会いでした。本当は須永さんが描かれた絵や書による作品の方が何倍も素敵なのですが、著作権の関係もあり詩だけを紹介させていただきました。須永さんが描いた「第一歩」をご覧になりたい方は、須永博士美術館スタッフブログで見ることができます。

<https://blog.goo.ne.jp/sunaga-hiroshi-b/e/d6966f989955acba55ce2bcaab24fec6>

「おれはかまきり」は誰もがよく知っている工藤直子さんの詩集「のはらうた」に掲載されている詩です。国語の教科書にも「のはらうた」は採り上げられているので、きっとみんな見たことがあると思います。たくさんの詩が掲載されていますが、ちょっぴりユーモラスで元気をもらえるかまきりりゅうじの詩が私は一番好きです。6年生のみなさんにも、ぜひもう一度手に取ってほしい詩集です。



最後に紹介するのは谷川俊太郎さんの「歩くうた」です。谷川俊太郎さんの詩は国語の教科書にも多数掲載されていて、1年生の教科書に「きつときつてかってきて」、2年生の教科書に「ことこ」、3年生の教科書に「どきん」「たいこ」、4年生の教科書に「およぐ」「つき」、5年生の教科書に「かんがえるのって おもしろい」そして、6年生の教科書には「生きる」と、全ての学年の教科書に作品が掲載されています。

今回採り上げた詩「歩くうた」は、谷川俊太郎少年詩集「どきん」の中に掲載されており、この詩集の中には他にも表題の「どきん」や「みち1～12」「交響楽」「サッカーによせて」「卒業式」「ぼくは言う」などたくさんのおすてきな詩が掲載されています。「歩くうた」は私が詩を好きになったきっかけの詩のひとつで、今から25年くらい前に担任をしていた4年生の子どもたちと一緒に群読をして何度も何度も読んだ、私にとってはとても思い出深い詩で、これまでも何度か、卒業する子どもたちに贈ってきた詩です。

歩くうた

谷川俊太郎

ひとは歩く	ひとは歩く
てくてく歩く	すたすた歩く
ひとは歩く	ひとは歩く
のそのそ歩く	とぼとぼ歩く
ひとは歩く	ひとは歩く
ぶらぶら歩く	ののし歩く
ひとは歩く	ひとは歩く
道がなくても	扉を開けて
ひとは歩く	ひとは歩く
砂漠をこえて	錠を壊して
ひとは歩く	ひとは歩く
よそ見しながら	壁をつきぬけ
ひとは歩く	ひとは歩く
好きなほうへ	大地を踏んで
ひとは歩く	ひとは歩く
今日から明日へ	国境をこえて
ひとは歩く	ひとは歩く
自分の足で	ひとを助けて
ひとには歩く自由がある	ひとには歩く自由がある

この「歩くうた」を読んでから、詩を読むことが好きになった感がある私は、以来、担任をさせていただいたクラスの子どもたちの誕生日には、必ず学級通信に「お誕生日おめでとう」のメッセージとともに、その子に合いそうな詩を1～2編掲載し、プレゼントしてきました。今回採り上げた5編の詩も、ほとんどがその頃に子どもたちにプレゼントした詩の中から、特に印象に残っているものです。

子どもたちに紹介したい詩、お父さんやお母さんにも一緒に読んでもらいたい詩はまだまだたくさんあるので、もし機会があったらどこかで紹介させていただきたいと思っています。



【おまけ】

右の詩は、私が最初に「この詩いいなあ」と思った記憶がある詩で、当時の高校の国語の教科書に載っていました。

今、読んでみるとあまり心に刺さる感はないのですが、高校生の頃の私には、何か感じる場所があったのだと思います。

竹、竹、竹が生え、	かたき地面に竹が生え、	かすかにふるえ。	根の先より織毛が生え、	地下には竹の根が生え、	光る地面に竹が生え、	萩原朔太郎
青空のもとに竹が生え、	地上にするどく竹が生え、	かすかにける織毛が生え、	根がしだいにほそらみ、	青竹が生え、		
凍れる節節りんりと、	まつしぐらに竹が生え、					